

中外新聞

合本

卷



8
9
5

東洋新聞

慶應四年五月第三板

中外新報

卷五

第廿八号より
第三十四号まで

開物社印

中外新聞第廿八号

慶應四年閏四月廿四日

同和局
新聞
社印

總督府より仰出の趣

松平肥後追々暴動に及ひて其既に罪魁を以て死一等社宥
以上ハ悔悟伏罪 由仁惠を仰ぐに於てハ寛典の由所置可
有之に心を得違ひ無之に可仕旨 由沙汰以事

四月

右由請

由沙汰の趣難有拜承仕に共徳川家名の成行不見届内ハ
決而謝罪仕る者覺悟に可然由沙汰奉願以上

第廿八号

○或も曰會津侯も只管恭順を尽し天朝へ哀訴の状を奉
まり其文意の伏見の一條は付て咎めの後より其時
の先鋒隊長を斬首し差上可なり且本城と相離し領地の
内を差上いても不苦但し右の通罪を私一か引受けは
付て主家より江戸内府の元の如く復官復祿は仰付は
振仕度左も無之主家へ咎めは仰出は振の事より
決し服罪を仕る友との趣あり例の如く中途は滞り
て未だ天聴は達せざと云ひ或も曰會津侯は謹慎恭順の意
動く事ありと雖も家臣は激徒多く脱走し諸方は潜伏
し南方の兵を襲ふんと謀る者関東諸州は充滿を其数四万

は過く可しと但し是は風説の傳ふれば其詳を知る可らば

○東久世殿廿二日横濱より俄に江戸西本願寺へ轉移なり

○横濱在苗外国人書状の訳

本月十一日英国蒸氣船にヤコ入津を其船は乗来たる者の
話より京師は於て関東の處置振の評議もちあり長州侯
も速に寛大の恩典を下し侵掠の地を還さべしといひ藝州
侯は徳川前將軍を初め官位は復し諸侯の長として議事院
の上席は列せしむべしといひ因州備前其他二三の諸侯は
封を削りて三四十万石の諸侯よりむべしといひ或は一
二の諸侯は全く徳川氏の家を滅却せしむべしといひ是は

依て評議急は決せんとし、其事實は然るや吾等の意を
以て測る所とて、朝廷より急は寛典を下し、はざるは
於ては愈北部諸侯の志を固め、日本分裂の勢止む事能ふと
す、至るべし然るに南方諸侯の内にも互は紛争を生じ終
は禍乱やむ時ありとん
或る外国人北方諸侯へ夥しく施條銃を賣り、る者なりと
聞く若し実事ありば是亦局外中立の律は違へり

○
閏四月のころ

聴雨

世の常はならぬ月、空あれば詠む袖もろくは頃うれ

ふらん

岡本長之

年を経し千代田寶田荒はけり、とくをきうへせ千代田寶田
うれをりよう

らみらん

武藏野の尾花う波をきくとも二荒の山の月へ曇ら
おのら身の上の思をてかゝる角のいろそひあまれい
つゆ

感慨偶作

水哉逸史

要息干戈解内憂、其如外寇覬神州、桓文功業王家貴、周召風治
民庶休、萬世應須金玉璽、一時莫誤缺金甌、請看角逐分争勢、蚌
鷸并遭漁父收、

○ 閏四月十六日出板横濱新聞の訳

六ヶ月以来日本全國騷擾を生じ貿易の妨最甚し元来今年頃ハ貿易も餘程盛んニ成るべき見込ありしが忽ち差支を生じ即今に至りてハ當春迄伏見ニ於ける戦争より遙ニ過きし大變將ニ起らんといふ大坂を日本の中心として四通八達の要地あり此地一たび勝ち誇る南方諸侯の有とありて天子も御幸ありしども東西諸国の事治まらん各藩蜂起の注進頻あり故に彼の権臣等止むを得ば此土地を捨て天子を擁して京都ニ歸り

北方有力の諸侯皆暗ニ會津を授け更ニ南方の會盟ニ加ふるの景色あり然るに會津も尚自若として動うん時機に至らざる故にや少しも戦形をうつらば兵書といはゆる備へ有る者の必ず輕舉せず輕く動く者の必ずも備へ有らんといい語を以て鑒れハ會津ハ日本全國中の強藩といふも其實を得たるが如し

○ モニテウルと名くる新聞紙ニ或る英吉利人魯西亜領のベリヤよりヒンランド辺の紀行を抄録せり其内ニ彼地の氣候を説きしる条あり左の如し

夏至後二三日の頃より積雪始め融解し大抵十日程の間
は残雪皆消し小暑を過れり野は始め緑草の芽を生ずる
を見る土用の前一兩日より草木花を開き大暑後二三日は
既に実を結ぶ其立秋前四五日は至るに悉く熟し立秋
後十日を経ざるに草枯木落て雪を見る大抵年々一
二日の差をられども概算するに一年三百六十五日の内僅
五十五六日の間は春夏秋の三季忽ち過ぎ去り之は反して
冬季の長き事三百餘日は過く酷寒凍沍を贅言を待たば
訳者云魯西亞は世界第一の大国なれども其領地は此
の如き氣候の地方極めて多し故に我國の如き寒温中和

の国に住むる者の生民の大幸あるを忘るべし且随
て魯西亞人の我土地に望みを掛くる故を察さば

○四月廿八日出板印度シンガポール新聞紙の訳
仏蘭西○日本在留新ニストルムウトレイ是まぐのニニ
ストルレオンロゼの代として今便此表を出立を

閏四月十七日横濱に到着せり

近來仏国より戦争の起るべき由流言大に行なれども都
府巴黎より却て静謐無事あり或は云ふ政府より何時を
論ぜば大軍の出さるゝ振ふ右等の説を流布して人氣を鼓
舞せり

ベルギー国王レオポルド近日巴勒マ来着なり
○瓊地利の政府よりハノーフルの廢王を勸め他州に於て
新王府を建てしめんとす
○魯西亞の奔ルナの新奉行波蘭人の権位旧格を悉く停止せ
んとする沙汰を出せり波蘭人表向きを恭順して其命を受
くと云

○
四月中水戸脱藩の士四百餘人新泻に著し其内八十人程同
月廿五日佐渡へ渡海いづれ姓名ハ不分明へども重臣に
交り居り由佐渡より報告あり

中外新聞第廿九号

慶應四年閏四月廿七日

○シンガポール新聞の續き

イスパニヤ国は於てカタロニーとソム地と一揆起り
諸職人産業を廢し國中穏あらず
○仙蘭西の魯西亞公使ハロンドブトベルグ近來バロニ
エンドルフと中惡しうりうり退役の後又傷及べり
○ポルトガル国の王妃イタリヤへ旅行を
○エジプト国王疾病危篤其嗣子幼冲より僅六歳あり若
し国王薨じると至らば政事向必を乱るべしと国民疑懼を

抱きり

亞墨利加合衆国勝手向不融通の模様なり四千万ドルと差
丈へ官借の沙汰なりと云

アビシニー国王暴悪あるに依り英国より兵を差向け戦争
ありしが此節国王ゼオドル不快して銳氣大に衰へ英兵は
抗するの力初めの如くあらざると云

川本清次郎 訳

○

英国医師ス子ール宇和島藩士と途中を警衛せしめ神田橋
内元酒井左衛門尉屋敷に滞留する官軍の怪我人を見舞ふ

度々来りし由

姫路老侯先頃国許へ出立し途中より俄に江戸へ引返り
成り右を箱根辺に浪士夥しく屯集し通行し難き故あり
との風聞ありしが多分虚説なりと雖も實に病氣に付引返さ
しる由あり

○火薬雷粉を廢相と取扱ふも戒め

大抵人の怪我過ちの平生の心得方處相あるに依る者あり
近來砲術盛んに行き又付て火薬雷粉を製する者も賣
買する者も次第と多く成る故にそれ為に怪我をふし身
を傷む命を失ひしる者も亦隨て多し其内火薬を昔より取

扱ひ来りて人々皆おそろしき物と思ひ込に大切は取扱ふ
上は烟草の吸売或は炭のこせり又は蠟燭の倒るゝと
いふ縁故ありれは火を發する事あり夫故火藥の激發を稀
あれとも雷粉に至りては僅に擦れ合ひ或は物の響きより依
りては俄に火を發するものありを以て最恐るゝきもの劇藥
あり然るゝ世人の取扱ひ慮相あり故にや年々雷粉の爲に
怪我する者少く先年日本にて始めて雷粉を製せし人
を尾張の医師より吉雄俊蔵後又常三と稱せし人あり

遠西觀象圖說西說觀象經粉砲考等の著述あり

此人も可憐雷粉の爲に手を傷み其症終に平愈せしと云物

故せり是を天保年中の事あり其後雷粉より生命を損ぜし
者幾人あるを知らん此程都下穩あつたり最中本郷附木店
辺より雷粉誤て火を發し即死一人怪我人兩三人あり其
時を雷粉の發する響を聞き近辺よりは砲声歟と思ひて
大に驚怖し混雜せし由あり

右等の事ありは依て西洋書中の文を抄訳して以て戒とし
○雷粉を只鉄と鉄との間には置き打合をせしのみあり
銅真鍮或は硝子より木より打合をせし或は強く摩
擦する時を必ず火を發せしを以て管に詰りんと欲せば
常に水を和し置き決して乾燥せしむる事ありれ目方一匁

位より多くハ一畚ヲ入置くべし其貯へおく時の必要
少しつゝ分けて紙ニ包み書物の間ニ挿さまかく或ハ木の
小さき箱又分々て入置くべしそれ成る丈水を打ち
てしめし置くべし雷粉を製して日光ニ晒し日干りの
温氣ぬきを火を焚くせし事度くられり實ニ恐るべきの
最第一ありと云

厚生堂主人 訳著

アメリカのニウヨルクニューヨークに珍めづしき物を發明し始め是を
製し出せり其名をスチームメンといふ蒸氣人形といふ事
あり此人形の全身鉄てつにて造り其高さ七尺九寸目方五百斤

なり價銀凡三百ドルなり出来を人形の足を鉄板にて是は
蝶ちょうつがひをぢき金等を備ふ人形の胃の腑ふを竈かまどにて胸
は蒸氣罐を仕掛け烟けを頭上へ抜く此人形は車を挽ひ
りせ其車は乗り行くあり其速すみある事大抵日本里数一里を
七ミニートに走りぬべし勿論道路の屈曲くつぎくは随て方向かきを替る
事を自由あり且路は少しの高低こういなりても差支へあり實は
希代の仕掛ありと云ふ此物なり終に世は行をくは至ら
ば諸葛孔明の木牛流馬も物の數ありと謂ふべし
右和蘭の新聞紙より抄出

廿二日の夜牛込揚場（牛込）に繋つなぎ在りし荷船へ賊四五人來り矢
庭（庭）に番人一人を切殺し外一兩人は手を負おせしり近辺の
者馳いせ集あまり一人を捕とへ得しり其餘の鉄砲を放ち砲
声のきざれは逃去りし由

○京都より仰出の趣

酒井左衛門尉

徳川□□此處置の儀追々此沙汰の趣も有之に通叛逆顯
然其罪天下万民俱もに所知りて終は恐多し其親征行幸
は為遊深くは為（おぼ）候宸襟（おの）に於今日に至り全く恭順謹慎
の道相尽し折柄其方事既は當正月三日以來大變動に至

りし事跡承知致しあがら賊魁松平肥後其他兇徒共は與
益暴威を募官軍は抗し万民塗炭の苦を不辨言語道断の
次第天人俱もに所惡不届の至し依之は止官位は条家來の
者に至るまで一切入京不相成旨は仰出の事

閏四月

○請西侯の歎願書

此度徳川□□恭順の廉を以ては仰出の五ヶ條の儀実行
相立以上も寛典の此處置を以て徳川家名は立置の段は
仰出誠以此憐愍の此沙汰難有仕合奉存然る處恐多き嘆
願は座に共私家筋の儀徳川家康九代の祖松平親氏

臣下は強成たけなりいてより以来譜代ふだいの旧臣より三百餘年の恩義おんぎ海岳かいがく実じつ以もつ忘却ぼくわく難仕なんし座ざの間徳川家名なを立たて以上随從ずいじゆう仕多し年の恩を報はぐり度志願どしがん座ざの依之私領地しりやうち献納けんなく仕度何卒しどなんぞ右の情実じやうじつ聞きこし食めし分わせられ如前ごと徳川家僕うけは成下なり置おけ松泣血まつなみけ奉ほう歎願たんがん以上

四月

林 昌之助

○ 三條大納言殿を博学はくがく寛仁かんじんの長者あり且能く下情かじやうも通せられし由よしふれど不日は寛大の恩典を布告ふこくありし御相續そうぞくを勿論もちろん江戸市中元しやうちゆうげんの如く成るべしと諸民喜よろこび合へり

中外新聞第三十号

慶應四年閏四月廿六日

閏四月四日大坂より於ては仰出の書付写

一此度大総督官より言上の趣も有之徳川□□降伏謝罪奉仰あきこ天裁てんさいは付てい非常至仁ひやうしじにんのおと慮りを以て寛典かんてんの由よし處ところ置可おけ仰出依之来七日還幸えんさうは為在なり旨しは仰出の事

閏四月

○同月十一日は仰出の趣

三條大納言

今般徳川□□降伏謝罪奉仰 天裁以付以至仁之 慮
寛典の 此處置 仰出以速東下億兆人心安堵以振
取計可致撫て此委任可為関東監察使の旨 此沙汰以事

後四月

江藤新平

小笠原唯八

新田三郎

右同断ニ付附属ニ 仰付以事

萬里小路辨

今般為関東監察使三條大納言ニ差下以間為附属東下ニ

仰付以事

松尾伯耆

中川對馬

三條大納言為関東監察使下向ニ 仰出以間附属ニ 仰付
以事

○

ロンドン、エンド、マイ子と名くる新聞紙ニ仏国帝ナポレオ
ン大病の由を記せし故ニ之を訳し第十五号ニ出せり其
後公私雜報も同事を載せし然るに右ハ全く傳聞の誤
あり病氣ハ一時の事ニ速ニ全快し當時壯健無事あり既

よ近日帝妃同道より芝居見物へ行かれし事も有り右の如
き風聞の起りし英吉利のプリンス鉄砲の中りし頃の事
より西洋諸州様の風説有りし故ありと仙蘭西人の物語
あり因て爰に記し十五号の誤を正す
尾州佐屋辺の文通の由より名古屋の藩中二三に分ち國內
穩あらず其内浪士蜂起し犬山落城及び名古屋城を勿論
市中も過半焼失の趣を記し明細の書付を得し但し
日附疑しきに依り尚更探索を遂げし処全く右の書付を
偽物の由去あらず藩士互に黨を結びて不日は内乱の起る
べしと云ふ事を実事ありし

レ
今月四日奥羽北越の十三諸侯越後の椎谷より於て會議あり
其事未詳あらず或る云ふ會津の重臣も列席せりと
岩倉殿の忍より館林高崎に移り廿二日又江戸因州屋敷へ
歸着せらる

横濱在住の兵卒百人程脱走し行方を知らざる由
水戸表に極め静謐より往來道路も差支ありといふ野
州総州の事も追々鎮静を
庄内の兵天童を攻落し山形より由の報告ありし依
て官軍追々羽州は発向を仙臺と會津の戦を其後如何あり
しや未詳あらず

昨日別紙金銭相場改正の由布告を得て依て速に出版せし
一 処其後或る友人より増補せし稿本を送りしより今改
めて附刻す

○三條殿昨廿五日朝由下着相成の由

一 昨廿四日朝大川端ある久世侯の屋敷内より戦ひあり双
方怪我人あり程よく引かれ又成る由

十八日十九日又日光辺に二三度戦ひ有り由

廿五日官軍急な浅草由門兩國辺を厳しく固めしり市中大
に驚怖を

○

百兩に付目方金位 百兩に付此通貨

慶長金 小判 一分

四百七十六匁 金位 百兩に付此通貨 九百。五兩一分二朱又換

武藏判

同 同断 右同断

表ノ字金

二百五十匁 同二百五十匁 同三十九匁二七 四百七十五兩二分

元禄金 小判 一分

四百七十七匁 同二百七十三匁六三 同二百七十三匁六三 六百三十四兩三朱

享保金 小判 一分

四百七十六匁 同四百七十三匁六六 同四百七十三匁六六 九百三十兩一分二朱

元文金 小判 一分

三百五十匁 同二百二十六匁 同二百二十六匁 五百十八兩二分二朱

真字二小判

三百五十匁 同四百九十七匁四五 同四百九十七匁四五 四百六十兩

文政金 小判 一分

三百五十匁 同断 右同断

壹朱金

六百匁 同七十三匁三八七 同五十七匁七三 二百五十七兩一分二朱

草字二分判	三百五十匁	<small>金百七十匁二 銀百七十八匁九</small>	右同断
古貳朱金	同	<small>四百三匁六六六 四百三匁七三三</small>	二百六十。兩三朱
五兩判	百八十匁	<small>四百五十一匁七二四 四百二十八匁二七六</small>	三百四十二兩一分二朱
保字 <small>小判 一分判</small>	三百匁	<small>四百七十一匁三二六 四百七十九匁七五五</small>	三百九十七兩二分二朱
正字判 <small>同</small>	二百四十匁	<small>四百三十三匁五八二 四百三十三匁七一九</small>	三百十七兩一分
安政二分判	三百匁	<small>四百五十八匁六六六 四百四十八匁三三三</small>	百六十一兩三朱
元祿大判	一枚目方四十四匁一分		六十一兩一分二朱
享保大判	同		七十八兩一分
慶長大判	同		右同断
新大判	三十匁		廿六兩二分一朱

寛永鑄錢 代リ廿四文 天保錢一枚又付 四枚を以て換

同銅錢 代リ十二文 同 八枚を以て換

文久銅錢 代リ十六文 同 六枚を以て換

天保百文錢は是れまでの如く通用

大政店一新又付字内貨幣うぶあひの定價は吟味の上古今通用金銀銅錢等別紙の通な仰出は間末くまで不洩れ松可相觸ものあり

慶應四辰年閏四月 太政官

中外新聞第三十一号

慶應四年閏四月廿九日

紀藩より官軍の冬謀某へ呈せし書

當正月三日伏見表に於ての事件に付不計も奉觸
旗輝動又至りて段誠以奉恐入に至極此座に元より於□□
を尊王の志厚く朝廷に對し奉り反心無此座儀を数ヶ
年の朝觀より実行判然とくべく加之政權奉返上只管
皇國保全有之度志願の外二念無此座に會衆以下の者共も
時勢不得止の事情より臣子の至誠難默止赤心又出其事聊
過激に涉り候も可有此座にへ共是以て奉對 朝廷毛頭

異心を挾い候は無座に然る今日の状態は立到り候段
日夜慟哭涕泣在候處尚徳川家へ付ての歎願をば不為
聞召し沙汰をも奉畏此上哀訴の路も絶果是天又号泣
微運を悲し折柄参謀當地へ出張の由承り尊藩從來縁
辺の私親をも姑く置き兼く依頼在候故を以此度宗家
の事件へ付ても厚く周旋下度哀情吐露仕候□□恭順
謹慎無二念の段達 殿内寛典の由處置可仕 仰出旨然る
上一時の罪名由氷解徳川家安堵の由沙汰成下候依
と奉存候へ共方今府下人心恟々動もされば擾乱を可醸成
勢況や徳川氏三百年の治世恩顧譜代百万の臣民悲歎堪

兼候より動揺仕り一度干戈動き應仁末の轍を履候松成行
候へ上を對 朝廷実以奉恐入下候億兆生灵の塗炭も惻
然々々く將海外の覬覦も如何可有之哉と杞憂百湊此事
又由座に先年毛利家一旦 朝敵と相成候處非常の 天恩
を蒙り候至近の先例も有之旁徳川祖先以来の功業を不
為棄此上共厚く由周旋成下度是偏又徳川氏一家并其
臣民の幸福のみは無之 皇国万民の為敢て奉懇願以上

四月

紀州 在府家来共

○三月中京都より 仰出趣
近來宮堂上方名目より由貸附金と称し取扱候向も往々有

之趣又相聞え以の外の事又今般ハ一新の砌右松の儀を
無之筈自然右ハ似寄の儀取扱ハ者有之とおいてハ此の
上嚴重のハ沙汰ハ間心得違無之松ハ仰出ハ事

三月十八日

裁判所

四月廿九日太政官代又於て軍防掛り鴨脚下總を以て左の
書付を信濃義濃各藩へ達せらる

戸田采女正

真田信濃守

其外十七藩

松平肥後其他賊徒益反逆相募北越より信州表へ侵入の段
相聞え以又付尾張大納言へ追討ハ仰出其藩の儀も同松
ハ仰付ハ条万端尾州中談同心戮力速又逆賊討伐致さる
き旨ハ沙汰ハ事

四月廿九日

同日尾州侯ハ中又不及駿遠三各藩へも同松ハ達有之由
牧野遠州へも同松のハ達ハしりしが別段歎願の次才又依
りて出兵を免され左の如く相達せられし由

牧野遠江守

信州路へ賊徒侵入又付出兵ハ

仰付ハハ共其藩の儀碓氷

嶺警衛^{しやうけいゑい} 仰付置^{おほつけ}いふ付被^{おほつけ} 免^{めん}い条猶亦関門^{かんもん}嚴重^{じやうじやう}相守^{しやうしゅ}い
振^{ふる} 沙汰^{さた}い事

閏四月十五日

○ 岩倉殿^{いそくさ}館林城^{くわんりんじやう}に滞在^{たいざい}在中閏四月十五日夜左之通^{しやう} 仰付^{おほつけ}い
と子細^{こさい}い未相分^{みさうぶん}らん

謹慎

参謀

長藩

曾志幾金三郎

同

須坂藩

寺角周助

同

館林藩

齊田源藏

同

関口喜兵衛

同

佐藤 勇

○ 近日新報

十九日夕前橋の兵沼田を出立し三国峠の方へ突を
三国峠の向ふは會藩^{かいはん}と他の脱走^{だつそう}兵は未と相分らん新聞
を設け往來を改る事甚嚴^{きんげん}き由

廿一日安中の兵一小隊沼田へ出張を

廿二日高崎に於て諸藩重役の集會あり巡察使^{くわんさつし}原安太郎の
呼出しに依てあうべし

奥羽各藩白石に於て會議し會津侯の爲に建白書^{けんはくしよ}を出せり
然るに勅使九条殿に尤の事ありとせられしが参謀おそ

不承知の者もありて未決より

仙臺南部三春二本松岩城平本の兵白川城下に出張せしう
今月十七日頃より各藩思ひくは退陣せし由
右といつれも慥ある風あり

或へ云ふ廿日は三春の関門打破られ岩城平の兵と會津の
兵と一戦あり勝敗あり

又云ふ白川城戦争中官軍の内は裏切りせし者ありて城中
より火の手上り落城し及ぶ市中も焼失せしと但し此二ヶ条
をいふと委しき報告を得ざる故に虚実定め難し重ねて慥
ある便を得て書記を

四五日前深川清住町関宿侯の屋敷は騒動あり其近辺の
風聞は此程下総の戦争は依り久世侯深川の屋敷に來り居
られ処家老某といふ者官軍に加わり不意に襲ひ入り侯
の居間へ鉄砲を打掛けし之に依り其家臣共必死を極め
て防戦を然る処熊本隊長これを見急ぎ双方を引分け
侯は鉄砲を向けし者い何ふ不届あれば此方より處置可
致し其人を引連れ歸りし由

中外新聞第三十二号

慶應四年五月二日

閏四月二十二日横濱出板新聞紙の抄訳

日本の国勢^{こくせい}弥^や傾^{かたむ}きて次第^{しだい}に晦冥^{くわいめい}に至^{いた}らんとて國中^{こくちゅう}悉^{ことごと}く分^わ裂^{れつ}争^{そう}乱^{らん}の徴^{しるし}候^うを^みら^せるに戦争^{せんそう}起^おき^まる評判^{へいはん}なり
四月上旬^{しがつじゅうかん}亞墨利加^{あめりか}より来^きり鉄船^{てつせん}スローン^{スローン}ヲール^{ヲール}を元来^{もとより}
江戸政府^{えどせいふ}の詔^{めい}へ^きて既^{すで}に内金^{うちきん}をも請取^{きんぐ}り日本^{にっぽん}へ渡海^{わかい}せ^し
あれども其船^{そのせん}の到着^{たつちやく}せし頃^{ころ}日本^{にっぽん}紛争^{きんそう}の始^{はじ}まりて局外^{きょくがい}中立^{ちゅうしりつ}
の觸書^{ふくしよ}を出^だし^てる折柄^{せうがら}故^{ゆゑ}何方^{どなた}へも引渡^{ひきわたし}さば^ず亞墨利加^{あめりか}の旗^{はた}
章^{しやう}を建^たて^る當港^{たうかう}に滯留^{ちうきう}せり然^{しか}るに^も此程^{このほど}大原^{おほはら}前侍^{ぜんざい}従^{したが}より右

鉄船を相渡し吳に抵代金も如何程でも拂ふへとの掛
合はり依てミニストルフンブルグより此次の便
は本国へ其事をや遣ふ大紗領の命令を待つべき由その
命令達せざり間の相替る中立の規則は随ひ何方へも賣
渡を事ありとす

○仙臺米澤両侯より奥羽鎮撫總督へ中立の書付
討會先鋒に仰付兩國とも出兵は在既は仙臺先手勢及接
戦は処今般降伏謝罪の儀容保家来共に出は付仙臺国境
陣門は於て門罪督責致させは処伏見暴動の一番を畢竟指
揮不行届より事卒然は發り天聴を驚き奉りは段至極恐

縮の餘容保儀を歸邑退隱の上當時城外は於て恭順謹慎相
尽し頗る先非悔悟は在寛大の由處置は成下は別紙歎願
書の通家来共に出は間益天朝の由仁德奉感戴は由處
置奉伏望は會津国情等の儀を委細演説を以て中上は通は
由座は間深く由汲量寛典の由沙汰は成下は同一奉懇願
は以上

閏四月

仙臺中将

米澤中将

○會津藩の歎願書

弊藩の倭は山谷の間は僻居は在凡氣陋劣人心頑愚より

旧習^{ふるし}は泥^{どろ}み世変^よは暗^{くら}き土俗^{どふく}は此^こ座^ざに於^お老寡^{らうかう}君^{きみ}京都^{きやうと}守護^{しゆご}の
職^{しやく}を付^つけ以来^{いらい}不及^{ふたふ}天朝^{てんてう}尊崇^{しゆんそう}奉^{ほう}安^{あん}宸襟^{しんせき}度^ど一途^{いつと}の存^{ぞん}
念^{ねん}より他事^{たじ}無^な之^を粉骨^{こなを}碎身^{さいしん}を在^あ万端^{ばんたん}不行^{ふこう}届^{とど}の儀^ぎはこれへど
も朝廷^{てうてい}の由^{よし}垂憐^{しうれん}を蒙^あり多年^{たふねん}の間何^{いか}と欣奉^{きんほう}職^{しやく}仕居^{しき}臣子^{しんし}の
冥加^{めいか}無^な此^こ上難^{じやうなん}有^あ奉^{ほう}存^{ぞん}鴻恩^{かうおん}万分^{ばんぶん}の一^{ひと}も奉^{ほう}報^{ほう}度^ど國^{こく}奮^{ふん}勵^{れい}を在^あ
奉^{ほう}對^{たい}朝廷^{てうてい}の後^{のち}間^{かん}き体^{たい}の心事^{しんじ}神人^{しんじん}に誓^{ちか}ひ毛頭^{もうとう}無^な此^こ座^ざ伏^{ふく}見^{けん}
一舉^{いつきよ}の儀^ぎは一事^{ひとじ}卒然^{そつぜん}に發^{はつ}し不得^{ふたふ}止^{とど}次第^{しだい}柄^{けい}はて是^{こゝ}亦^{また}異心^{いしん}等^ら
有^あ之^を儀^ぎは毛頭^{もうとう}無^な之^を以^{もつ}得^え共^{ども}一旦^{いつたん}奉^{ほう}驚^{きやう}天聽^{てんてい}に段^{だん}を恐^{おそ}入^い
次第^{しだい}に付^つ歸^き邑^{いふ}の上退^{たい}隱^{いん}恭^{こう}順^{じゆん}を在^あ此^こ度^ど鎮撫^{ちんぶ}使^し此^こ東^{とう}下^げ此^こ
兩藩^{りやうはん}へ征討^{せいたう}の命^{めい}相^{さう}下^げり由^{よし}承^{じやう}知^ち仕^し愕^{がく}然^{ぜん}の至^{いた}り斯^{しか}まて宸^{しん}

襟^{せき}を悩^{なや}まし奉^{ほう}り儀^ぎ何^{いか}共^{ども}可^か上^{じやう}此^こ座^ざ無^な此^こ座^ざに此^こ上^{じやう}城^{じやう}中^{ちゆう}に安^{あん}
居^き仕^し居^きいて何^{いか}分^{ぶん}奉^{ほう}恐^{おそ}入^いに付^つ城外^{じやうがい}に屏^{へい}居^きを在^あ此^こ沙汰^{さた}
を奉^{ほう}待^{たい}ひ百^{ひやく}一^{いつ}視^し同^{どう}仁^にの由^{よし}宥^{ゆう}恕^{じよ}を以^{もつ}て寛^{かん}大^{だい}の由^{よし}沙汰^{さた}に下^げ度^ど
家臣^{けしん}をて奉^{ほう}歎^{たん}願^{げん}は右^{みぎ}の段^{だん}幾^{いく}重^{じゆう}にも厚^{こう}に汲^{ひく}量^{りやう}を下^げに取^と成^{せい}の
程^{ほど}深^{ふか}奉^{ほう}懇^{こん}願^{げん}は以上^{いじやう}

會津家老

慶應四年閏四月

西郷頼母

梶原平馬

一瀬要人

右の外列藩の願書より第三十三号より出

○再び 大総督府へ差出し建白書

負罪之小臣毎々冒瀆 尊威恐懼不少奉存いへ共既も又も不憚おそれ忌諱きぎ献言可仕 今旨をも蒙居いは付泣血奉言上い過日は仰出い 朝裁中玉石俱も焚く 趣意又無之段 沙汰有之実は 神武不殺の 王師誠又難有 聖慮又座い然る処今般 追討と 東下の砌徳川家譜代恩顧の大名旗本等只管 朝命遵奉既又先鋒と成り下りい者共 褒賞を蒙りい哉又奉拜承い軍機の上可然い事と為在い後とハ万々奉恐察いへ共其中或ハ其心底唯利是視歴世渥恩の主家又背き人倫の綱常を相失い輩も可有

之故若果と然らんと如何ぞ 皇国の為又忠義を可抽道理あらんやと奉存い寡君□□恭順の实功相立寛典の沙汰可い 仰出折柄 王政い維新の際徳川祖宗以来歴代君臣の義理を守り主家と存亡を共又仕度所存の者共と殷の頑民と同日の論と其情実憐あはむべき者又有之此輩天下又在い頑民又可有之い共徳川氏の為又ハ忠臣と可有者と既又其主家又忠い上ハ他日 皇国の為又忠勤を可抽者又相違有之と友と存い是等の情状并又仰出い 趣意又厚く深考を成下格別の 皇恩を以て此輩は 召上い知行所ハ差戻を成下い天地覆載

の 聖恩千万歳の下天下万民可奉感戴（感戴）存（存）此段奉（上）
以死罪（と）謹言

閏四月

勝安房守

○閏四月廿九日 大総督府より（主） 仰出の趣
□□伏罪（うづま）の上ハ徳川家名相續の傍（傍）も祖宗以来の功業（こうぎょう）ハ
思召格別の 獻慮（けんりょ）を以て田安龜之助へ（主） 仰出の事
但城地祿高の傍（傍）も追て（主） 仰出の事

中外新聞第三十三号

慶應四年五月四日

閏四月廿九日此達の趣

徳川龜之助様此事今日より 上様と奉称 上様此事を
前上様と可奉称（以）

右之通可相觸（以）

閏四月

此旗本此家人月代（きり）不剃（きり）此相達置（以）此明朝日より當地又此
在（以）者も一同月代剃（以）此可致（以）
右之通可相觸（以）

閏四月

○奥羽列藩の老臣、奥羽鎮撫總督府へ、立、書付
此度會津征討、仰付各藩出兵既、仙臺先手勢及接戦、
処容保家来共降伏謝罪の儀、出仙臺国境陣門、於て、
相達、伏見暴動の儀、全く異心、有之筋、無、
へども、一事皆卒然、相發、奉驚、天聽、
の先手隊長、おと別、謹慎、付置奉待、
置仕、由、
之、段至極、
悟、在、段家来共歎願書を以て、出降伏謝罪仕、上、幾

重、寛大の、
望、尤當時、王政、
不、為動、
奉存、勿論春夏の間、農時の甚急務、
民命の大、
成下今日の事を只、會津一藩のみ、
召寛大の、
之、為立、
輩、駢付、次才可奉、上、
慶應四年閏四月

仙臺 米沢
盛岡 二本松
守山 棚倉
中村 三春
山形 福島
上山 亀田
一関 矢島

ふいふ

根本公直

時鳥雲井ももふんきふりあり葵花さく時や来ぬらむ

○西洋諸国公事裁判の事

西洋より公事訴訟を裁判するもの第一刑法といふ者なり
て何れかの悪事を為さば何等の刑も行ふべしといふことを
委しめて定め兼てより之を世上に公布し置き若し之を犯す
者あれば即ち其定め通り刑を行ふあり次は裁判役にあ
る人も何身か抱えん法学の学校に入り政律の書を研
究し試験を受け甲科と登り而して後又始め役と附き訴
訟の事を取扱ふあり其外又又代官師といふ者なり亦法学
の試験のみ官府の許しを受けてありし人あれども官祿
はる者も非む公事を為さんと欲するもの之を頼む名代と

ありて道理のちらん限りの之を弁論するあり故又少年婦
女等の言ふ及ぶに総て弁舌巧ありて道理を説き明とこ
と覺束ありと自ら思ふ者と皆之を頼むことあり扱又吟味
の節は訴訟方と相手方と代るべく裁判役の前より出て紀
問を受くることより双方相對よて論弁することあり是皆
能辨ある者の不弁ある者を無理押と言伏せざるを妨せく
り又吟味中余人の見物を許し之を拒むことあり若し見物
中は自ら訴へ証拠は立とんとしふ者あれば内より入れて言
ふむといへとも連累の患あり或は連累は及ぶことな
れば休業の償を与ふるあり其他吟味の節拷問を用ひを拷

問を凡そ百年前より之を廢せりよ蓋し拷問の法は情
實を得ること少ありとされど人を無実の罪に陥し
こと亦多ければ詰る所無きの勝るるは如く且動もされ
ば拷問の方却て本刑よりも酷烈あることあり其他
中々越訴の法より假令は邑衙の裁判は服せざれば州衙に
訴へ州衙の裁判は服せざれば国都の大衙門に訴へ猶其上
は服せざれば國會の大評議より之を決するあり牢屋の法
最も心を尽せり大抵牢内入込といふことあり人毎に一
間を与へ且相應の手業を為せ徒然として居ることを許さば
右手業より得る所の錢を預置き出牢の節家業は取附く

べき手當とあり又望むによりて食物を買与ふこともあり
よー刑罰を極めて軽く嘗てより死刑を廢せんとの議あり
といふまじり其他推して知るべし心竟文教行き届き乱心欲
過失は非ざれば大罪を犯す者殆ど之とあきま至れもあり
是れ西洋諸国公事裁判の要領あり窃は唯るゝ我邦從來
裁判の法西洋は比すれば少く及ぶざる処ありは似たり
先づ第一は刑法の公布といふことあり役人を門地より出
て材学は抱えらる代官師といふ者もあく相對して論弁せ
しむるが故押強く弁口の過れくる者勝を取り且吟味の場
所を余人も見せざる其上拷問の法あり又其上越訴の嚴禁あり

るが故も若し役人は不良の心なれば私曲の何程うても出
来る道なり偶々傍より冤罪を知りて証拠を立んとする者
はととも連累を恐るゝ口を開くは牢屋を諸罪人入込あり
が故に入るとき左程の悪人は非ざる者も暫時の間は悪心
上達し出る比は眞の大悪人とあるあり刑罰の重きこと
と絶つし兩の盜賊を死刑は處するに至る然とも文教行
き届くは裁判當らざるが故も少く懲りることあく盜賊
の横行日甚し凡そ此數件皆我邦の西洋に及ばざる処歎
息は堪ざるあり方今百度の一新は相成り万国を壓する程
の法制度を立させらるべきものなり我輩小人驚喜よく

ど就て、此等の事を早速に改正有之度鄙心竊に希い望む所あり未と知らば四方有志の士如何ある高見なりや我を只我が思ふ所を述べ以て大賢の取捨を乞ふのみ

神田孝平 述

中外新聞第三十四号

慶應四年五月九日

横濱在由外国人より柳河氏へ贈る書翰の訳

新聞紙追々由惠投^{あて}下辱奉存^{こうぼうぞん}以小生倭此節閑暇^{えんあ}又有之日
本語学専ら相心掛け居る幸又中外新聞を披^{ひら}き讀^よ習^{しやう}い
へ日本文章と方今の時勢とを同時^{どうじ}に了解^{りやうかい}いへ故殊
の外重寶^{ちゆうぼう}な由度い尚此上引讀き無中絶に差送り相成い松
仕度^{いざぎ}に英吉利^{いんぎり}亞墨利加^{あめりか}和蘭^{わらん}三ヶ國の新聞紙飛脚船の度毎
又入手に間其度呈上可仕に誠又新聞紙由起立の候を此
上も無き美事として日本国益文明隆盛^{りゆうせい}又相成可なり前表と下

陰相悦いんさうえつひちの五大洲内いつれの国こく々々も新聞紙有之あひ
共国政正きこくせいしく人民開化じんみんかい化いいト以国程新聞紙盛さかは行なれい
又国政正またこくせいしくば奸詐けんさを以て民を使ひみは松の惡風有之あり国
々々へ新聞紙又実事を書記されきはを嫌きらひ折まり妨さまたげを致
しは松の事有之夫故新聞局の多少を以て其国の優劣ゆうりつを判
りし事又此座い且又小生輩こせいはいの如く数年故郷こきやうを離はなれ萬里外
に客居いい居いては本国飛脚船の参りまゐり度毎又新聞紙
の来きるを待兼まちは事霖雨中又日光を望むもち如く又此座いは新
聞紙の外孤客ぐこくの情を慰なぐさめいは寫真しやしんの画像がざう又此座いは毎い船
便べんに寄せ来りい父母妻子朋友の像を見てい其壯健そうけん無事むじな

るを知りて安堵あんどういい或時を獨居どくき岑寂さんせきに堪兼たえは節も朋
友の肖像せうしやうを反復展覽はんぷくせんらんいいは直ちは其人は對話たいわいい
は如く旅中の憂苦を忘わすれしは貴君先年写真鏡の書を著述
致され今年又新聞紙を創業有之さうぎやうは実又文明開化を助くる
の功少いくばといふべく旅客の情を樂たのしむる惠浅あうら
まといふべく希くは怠慢たいまんあいは勉強べんきやうは下度げどは以上

閏四月日

柳子曰本文過譽かほや吾何そ之又當あたるは足らんや然ととも
旅客りやくきやう只新聞と写真を以て岑寂さんせきを忘るといへる真情深
く心は感を依てよるは附記ふきをののみ

○外国人書状の抄訳

六月十四日日本閏月廿四日出

局外中立の規則ハ万国の公法ニシテ他邦人をシテ国内の
事ニ手を措きざらん爲の藩籬あり近年亞墨利加内乱
の時も各國此法を守り又日本も三年前長門の諸侯
ミカド及び大君ニ敵對セシ時各國亦其法ニ遵ヘリ米
利堅の南部も日本の長門も均しく其政府ニ叛きしもの
あれども各國より敢て政府を援くる事あり況や此度ミ
ミカドと大君政府との確執ニシテ大君ニ北部の諸侯
是ニ屬シミカドニ南部の諸侯とれを助くるニ於てを

や一兩日前奥州生糸を産する地の商人此地ニ来り去る六
月八日即日本閏四月十八日より野州ニ於て戦争始まり其
勝敗を詳あらざれども是より大合戦ニ成るべしと云へり
然れどもいまだ鎮定せずとも非を以て追々双方其實力を較
せしむるに至るべし然れ共数月の後を必き南北いつまの方ニ
終る一紗をぐし或い言ふ結局日本南北二部は分れ大坂
以南をミカドの所領とあり京都以北ハ大君の領地と
ありて講和するに至らんと此見尋常の議論ニ超えて奇抜
といふべし是も或る日本人有栖川宮ニ建言セシ説の由
り其書を吾ガ友人日本文字を解する者既ニ目撃せりと

云ふ不日は新聞局に於て英文を以て公行せしむと思ふ。
○六月十三日日本国四月廿三日東久世及び鍋島より各国
公使へ書状を送り国内の戦争を既に平定せし故に公使より
兼て觸れ置きし局外中立の規則を取戻し向後の武器
等をミカド政府へ賣り又ミカド方より船を雇ふ事差
支なき松布告せしとき旨往復數回に及びしことも其事未
整理なり

○閏四月廿二日亞墨利加商人所持の蒸気船カガノカに南
黨の兵五百人を乗せし北国に趣くんとし既に出帆せし處
合衆国の海軍士官にニストルの令を奉り此船を引戻し乗

込の兵を上陸せしめし又英國の蒸気船オリサカといふ
同名の船二艘あり其一艘を兵庫より兵卒を載せし廿三日
の曉天に當港へ入津せし英國にニストルの命を以て取
押へし今一艘のオリサカを此日石炭を積込し出帆の用
意ありしを見て或る公使より英公使へ書を贈りて心附け
し然るに此船も亦南兵を雇はし事相叶はざるべし
○中立の規則を取戻ししとき旨頻に鎮臺より懸望せられし近
日會議なりし然るにも公法を私情を以て動くべき者
は非れども如何の議論なりとも遂に中正至公の理
は帰するの外なきべし

○
江戸の或る士官一封の書翰を我が新聞局へ寄贈せり其文
も善良ある日本人の意思を述ふ看官之を讀まば都下の人
士我々兵力の弱くして外捍るも内衛るも足らざるを憂ふ
るの实情を觀るに足るべし其文は曰く
法蘭西教師の訓導を受けし日本士官の事は付き我が兵
制を成就する為めは我れ一説たり宜しく之を此新聞に出
さるべし我々嘗て兵制及び兵制の理合を説ける政羅巴書籍
数部を讀みしが法蘭西教師の指図を受けたる稽古せしより
日本より採用すべき諸事を明亮に悟り得たり

我等從來小銃大砲の運用を精密に知れり好き兵を得へ
と思ひ並に装束の事を餘り大切と思ひ過ぎしを大に誤
り若し兵士をしる法則を守らる程善く之を引率する
士官はるがやうに装束の整ひ屯所内より善く調練する兵
士ありしも総て無用な属を我々嘗て讀みし書中より七十年前
法蘭西国内乱の時少壯の人を以て兵隊を取立て甚と粗
る衣服より持具も十分ありん食料も甚と惡くし居られ
手一杯は取立てる兵士あり其時法蘭西の會計向甚と難
ありしあり然れども此少壯の輩僅に武藝の稽古を知りし
者より給金少く衣服持具食料皆惡しけれども其出陣の

始よりして毎度天晴の勝利を得て諸種の学は達し本國
を守衛する為め右の勇猛ある農民の頭は立ち戦を善く
する士官あらざりせば此の如き驚くべき功績を為す事難
かりしあらず法蘭西國は於てハ其諸科の学校なりて其
学校より此の如き才能鍊熟の士官を出せり此士官と嚴肅
ある規則とより依て法蘭西の新募少年兵堅固は仕立とる
改羅巴の老練兵は克捷せしあり

日本國は於て軍兵を成就し得べき着実ある士官を得んと
欲せし好き兵学校を設くるを要を先づ児童の小学校を建
て其教導の仕方ハ他日諸科の学は進み易き程又行ふべし

此小学校より出る少年武人と為らん事を次する者を尋
て改羅巴の法を以て設けし兵学校は入るべし右の兵学
校ハ云ふに好士官を製造する場所あり此場所を設くる同
時は於て兵隊須要の諸物を製造する局を成就せざる可ら
ず製鉄場を一種別科の士官必要なり其伎倆の教導ハ餘
の諸科と同く漸くは法蘭西教師の尽力にて為べきあり
我ガ朋友の中は使節の一員とありて改羅巴へ往き埃及を
經歷せし者なり其人の話聞きしは埃及は四十年以来
今以て法蘭西の教師傳習を為せりと云へり右教師の力
は埃及政府を以て速に上達せしめんと疑ふ蓋し此國

を往日実^と土耳其^との藩属^とありしれども軍兵の成就^と
うるは依て獨立^との國とありし我^と又嘗て欧羅巴の書中^と
云へるを見しは好き軍兵を唯^と外防^とは備ふるは要用あるの
みあらす又国内の寧謐^と礼序^とを保護^とするは在り是れ実^と善
良ある日本人の明^とり見^とる所あらむや右の事^とは付き是迄
一切^と忽慢^とし來^とるは辨^とを待^とて明^とあり
一例を挙て云へも我國の守衛兵を惡黨^との所業を探知^とする
事甚^と速^とあり然^とれとも之を防ぐは力足らざる事往^と之
より好き兵隊を備へざれむ用^とは足^とるの守衛^とあり凡そ文明
の諸國は於ても一般の礼序を保護する為めは老練^とし

諸級の兵を用ゆ此輩は兵隊の中^とは在て法則^とは熟^とし好き行
状^とは慣^とと理^とは叶^とへる勤方^とは達^とせり故^とは欧羅巴^とは於ては武
人他の文官の勤方^とよりも能^とくともあり武職を辞^としる老兵
士老下士官並^とは士官も他の諸勤向^とは於て端正精密^とは其分
を尽^とるあり

数年の間^とは外国人日本國の其期^とする所の景況^と即ち聰達貴
重^との國柄^とと為^とるを称^とする場^とは至^とるを要^とも我國直ち^とは欧
羅巴と同^と松^と又成^とるべき事^とこそ難^とうるべしと雖^とも好き軍兵
を備^とふれば外國の暴侵^とを防^とぎ且^と外国人不正の強談^とは及^とぶ
事ありとも必^とらば同盟の救助^とを得^とべし且^と又堺^と及び京都^と

て行り如き殺害を為し日本の暴人を防ぎ得へ此の如
き殺害の後又外国人は卑視せらるゝのみあり
日本國方今騷擾甚と進歩を妨く尤も憂べき所なり斯く厭
ふべき手段を以て日本の首族を衰弱せしむる国内の紛争
終る時と冀くても外国人を以て笑へしむる此不幸を速に除
るんことを冀くは速に和平に至り我々國人分立すること
あく合して一体とあり世界萬國は敬重せらるゝに至らん
こと歟

○追加

十日程以前の事あり神戸より英人一人和蘭人一人浪人は
襲われ英人を幸免とせしれども蘭人を深手を負ひし由
の報告あり

○西御丸にかいて 大総督府に 仰出の趣

旗下帰順之輩自今 朝臣とせ 仰付は間此段相達は事

五月

○

都より打手のはいくさ東は下らせと申しりとも
天朝の厚きはめくみと 前將軍公の深きはつゝみと

よりていつまでも災を免れ侍りけることのいと有りが
とさにくあん 新聞紙を置きあふ書肆某
新しき文の林のさしゆも皆あふみけのゆりけ也
さつきのころ思ひつけ侍りて

ちみ人しるべ

五月雨とおるり空のうき雲もあれあふさきもさく
ららめ

中外新聞第三十四号終

